緑と白とカンバの町
サンタクルス素描

高橋　貞雄

サンタクルスデラシエラ（以下、サンタクルス）市はボリビア多民族国（以下、ボリビア）、サンタクルス県の県庁所在地である。サンタクルス県はボリビアを構成する9つの県の一つであり、「オリエンテ」と呼ばれる東部平原地帯に位置する。一般的にイメージされる高地アンデスのボリビアの姿とはかけ離れ、海抜400メートルの平原にある年中温暖な緑の深い町である。

県人口は315万人、うち166万人がサンタクルス市に住み、国で最も人口が多い市である。農業生産を見ると、県は国内耕地面積の60パーセントを占め、主要農産物（大豆、ムギ、イネなど）の70パーセントを生産して、重要な食糧生産地となっている。製造業も盛んで、GDPの約30パーセントの金額を県の生産が占める。ボリビア経済を支える天然ガスと亜鉛やスズに加えリチウム、タングステンなどの鉱物資源の輸出を除いた、その他の輸出額（農産品その他の製造業）の割合をみると、県が 41.0パーセント、ラパス県が24.9パーセントと、他県を圧倒している。サンタクルスは他地域に比べ経済活動に特に民間活力が発揮されており、国内の経済活動の牽引役を担っている。このように、1940年頃に始まった農業開発や石油資源開発中心の東部開発以降、特に1953年にサンタクルス-コチャバンバ間の道路が開通してから著しい成長を遂げた県であり町であるが、一方で歴史も感じさせ、それは街並みに顕著に表れている。

写真：奥にサンタクルス大聖堂、手前にコロニアル様式の建物　　2017年

町の中心は「サンタクルス大聖堂」である。サンタクルス地域が国に先んじて、1810年9月24日にスペインから独立した日を記念した「9月24日広場」内にある。正面入り口を中心に左右対称にビルの4階ほどの高さの鐘の塔と展望台でもある時計塔がある。螺旋形の階段で時計塔を登ると、高層建築のない第一環状内の街並みを見渡せる。レンガ造りであるが、内部は木彫を基調とし、柱にはゴシック模様が施されている。町はこの大聖堂を中心に同心円状（環状）に広がっている。大聖堂を中心とした円を第一環状と呼び、現在では第八環状までその円が広がる。ちなみに、第三環状が約35キロメートルで、山手線一周ほどの距離である。第一環状内は高層建築が規制されていることもあり、スペイン統治時代の建物が今も残る。歴史を感じさせる街並みが続く。教会をはじめとして一般の住居もコロニアル様式のものが多い。第二～第三環状にはショッピングセンターなど大型商業施設を中心に、映画館、ゲームセンターなどの娯楽施設が入った高層ビルが集中し、高層マンションが連なる。ショッピングセンター周辺には、ポルシェやベンツなどの高級外車を扱う代理店や服やカバンのブランド品店も軒を連ね、高級レストランも多い。最近は日本食がブームで、フュージョン寿司が人気を集めている。フュージョン寿司とは日本の伝統的な寿司とはかけ離れた、カリフォルニアロールをはじめとした創作寿司の総称である。マンゴーを巻いた太巻きやブルーベリーのソースをかけた鱒の寿司もある。

経済的な繁栄による中間層の増加とともに高級志向や安全志向がトレンドになってきたようである。(次ページ目へ続く)

活発な経済活動、商業活動が呼び水となり、市の人口は爆発的に増加し都市化が進んでいる。2001年から2012年の人口増加率は37パーセントを記録した。この増加は、ボリビアの高地を中心とした農村部からの人口の流入が大きな原因であるといわれる。歴史的には1960年代まで緩やかに人口増加が続いた。1952年にボリビア革命がおこり、翌年には農地改革法が制定され、大土地所有制度が解体された。1960年代後半から「東部低地開発計画」が始まり、高地零細農民の内国移住が行われて人口増加も顕著になった。経済社会開発10か年計画（1962年～1971年）では、国策として内国移住が進められた。近年の急激な都市化に伴い、慢性的な交通渋滞、基礎サービスやインフラ整備の遅れなど弊害が出てきている。

サンタクルスに先祖代々住む人々には、先住民族のグアラニー族とスペイン系の人々との混血者の子孫が多い。サンタクルス地域に住む人々はカンバ（平原地域に居住する人々をさす先住民の言葉という説が有力であるが諸説あり）と呼ばれる。自らも「我々はカンバ」であると胸を張り、カンバであることに誇りを持っている。町のあちこちにグアラニー語を起源とする言葉を名前にした河川や道が残り、伝統的な食べ物の名の多くもグアラニー語である。もともとサンタクルス地域に住む人々とアンデス高地からの移住者との間に、少なからず確執があるといわれることもあるが、総じてこの地域の人々はおおらかで懐が深くそれぞれの文化や習慣を寛容に受け入れているように見える。サンタクルスへはアンデス高地からだけでなく、日本人、メノニータ、ユダヤ系など多く人々が多地域から移住してきている。メノニータ（英語ではメノナイト）は、アナバプテスト教派のメノー派キリスト教徒である。メノニータの歴史は16世紀、欧州のドイツ語やオランダ語を話す地域で始まるが、迫害を受け続け、17世紀末から北米、次いで南米への移民が始まる。独自の共同体を作って主に田舎に居住し、信仰を固く維持しつつ、服装も住まいも質素な古い時代の生活様式で暮らす。

”様々なルーツを持つ人々が暮らし、食べ物や音楽、あるいは婚姻関係などによる家族の交わり等に文化、習慣の融合が窺われる。奥の深い、興味の尽きない町である。日本や日本人が好感をもたれていることがよくわかる。日本製品への愛着、日本食や日本文化（ポップカルチャーを含む）への強い関心などである。日系人と触れ合う機会が他の地域に比べ日常的に頻繁にあるために日本語に触れる機会も多く、日本への関心も高いように思われる。これはひとえに移住者を中心とした日系人の努力の賜物である。（次ページ目へ続く）

写真：カンバの人「サンタクルス県知事」　2017年

都市化が進む一方で、街には依然として多くの緑が残っている。公園が多く、街路樹が整然と植栽されている。9月24日広場が市の中心の公園で、ほかに大小の公園が町の至る所にある。土曜、日曜には民芸品が販売される公園もあり、市民の憩いの場所となっている。代表的な街路樹は、タヒーボ（黄色、ピンク、白の花をつける三種類）とトボロッチ（白とピンクの二種類）である。花木の開花により季節を知ることができる。季節の経過とともに色とりどりの花が咲き乱れる。公園は、夕涼みをしたり、スポーツをしたり、思い思いの時間をゆったりと過ごす場所になっている。

9月24日広場には以前、ナマケモノが放し飼いにされていたと聞いたが、都市化により森が減少して今は一頭も見ることが出来なくなってしまい残念である。2012年5月28日付の「El Dia」紙によれば、久しぶりに公園にナマケモノが現れ、動物園に保護されたそうである。2013年10月9日付の「El Dia」紙には、「ナマケモノはサンタクルスのシンボルの動物であるが、森林伐採、山火事、都市化などにより、その生存が危機にさらされている。県の環境局では『ナマケモノの保護を通じた環境保護』のイベントを催し、食用とするトボロッチやアンバイボの苗木を配布して環境保全を訴えた」とある。アンバイボは熱帯アメリカ、特に赤道に沿った地域に分布する木で、幹や枝に竹のような節があり、中空の幹の中にアリが共生する。新葉をナマケモノが好む。

県の旗は緑と白で、この2つの色がサンタクルスの魅力を象徴している。緑は「豊富な植物と深い森」を、白は「高潔な人々」をそれぞれ表している。豊富な植物と誇り高き人々に癒される、愛すべき町である。(高橋　貞雄)

”アールディーアイ通信　No.93／2018から”

写真：タヒーボの木　　2017年

写真：国旗とサンタクルス県旗がたなびく　　2017年

トゥクマン素描（1）

及川　義明

アルゼンチン北部の都市トゥクマンで2013～15年の2年間、花卉栽培技術指導の仕事をした。アルゼンチン北部のアンデス山脈とラプラタ川およびパラグアイ川にはさまれた平地部はグランチャコと呼ばれ、トゥクマンはグランチャコの西端近くに位置し、標高が450メートルほどで山脈の東麓端にもあたる。ブエノスアイレスから北西へおよそ1300キロメートルの距離を航空機で約2時間飛ぶ。人口約55万(2010年)人は5番目の規模で、国の北西部の政治、産業、文化の中心地である。

空港からタクシーで10分ほどの市街地までサトウキビ畑が広がり、レモン畑も時折現れる。18世紀末にサトウキビ栽培が普及してから精糖、アルコール生産の中心地となり、1980年代に国内で最初にアルコール燃料の製造を開始したとのこと。近年は輸出向け濃縮還元ジュース製造のためのレモン畑が増えているそうだ。市街は碁盤割りされていて、広い通りと通りの間はおよそ100メートルである。街の中心部には10階建て以上の近代的なビルが建ち並ぶが、独立(1816年)以前からの低い古い建物も混在する。古い建物をきれいにリフォームして、マクドナルドなどの飲食店や衣料品店などに仕立て直して使っている。新旧の調和の取れた建物群は、観光にもっと利用できそうな気がする。

9月、春の到来を告げるピンクや黄色のラパチョの花が咲くと、市が主催する文化イベントの音楽祭が始まる。クラシックからロックまで、合唱コンサートも無料で楽しめる。ツクマン交響楽団のクラシックコンサートは、たまにしか使われないツクマン鉄道駅が会場である。先着順ですぐに満席となる盛況だった。演奏曲は誰もが知っているクラシック曲が中心で、きちんとした服装でしかもおしゃれをした老若男女がコンサートを楽しんでいた。音楽祭は1ヵ月間開催され、週末には市内の公園でクラシックや吹奏楽の小さなコンサートが開かれた。

公営の劇場でクラシック、オペラ、クラシックバレエを年中順繰りに公演していて、日本の映画館入場料の半額以下で楽しめる。メインの通りではいつだって楽器演奏を楽しめる。プロのミュージシャンにアマチュアも交じって、多い時は3～4組が路上で演奏をしている。人気があるのはフォルクローレで、目立つ楽器はギターとアコーディオンであり、バイオリンが入ることもある。ラテンアメリカの民謡であるフォルクローレは、スペイン系移住者がヨーロッパの音楽を持ち込み、先住民の民族音楽と融合してできたらしい。日本ではペルーの「コンドルは飛んでいく」、アルゼンチンの「ウマウアケーニョ（花祭り）」がよく知られている。アルゼンチン北西部が発祥地である民族舞踊音楽のチャカレーラは、ギターと打楽器のボンボの編成で、八分の六拍子のリズムに合わせて男女ペアで踊る。街にはフォルクローレ専門のライブハウスがいたる所にあっていつも賑わっている。チャカレーラはもともと舞踊音楽だが、ライブハウスでは楽器演奏と歌を聴く。タンゴのライブハウスでは客の誰もが踊り出す。

タンゴに限らず音楽が本当に好きな人たちである。授業料不要の音楽大学があり、楽器製造のコースだってある。プロにはなれなかったがプロとしか思えないくらいに上手な人に日常的に出会える。交響楽団のメンバーで楽器演奏個人レッスンのアルバイトをする人も多い。好機逸すべからず、週に1時間1000円で一年ほどバイオリンを習った。2年間の滞在を通して、日常のあらゆる空間で音楽、舞踊、絵画など芸術文化に親しみ、楽しむことができたのはこの上なく幸せであった。(及川義明)

”アールディーアイ通信　No.79／2015から”

写真：マクドナルド　　2015年

トゥクマン素描（2）トゥクマン人気質

及川　義明

アルゼンチン北部のトゥクマン州はレモンとサトウキビの生産で知られ、農業が盛んであるが、花卉生産の振興も目指している。各州にある国立農牧技術院の農業試験場のひとつ、街から30キロメートルほど離れた州農業試験場の花卉部門で栽培技術向上の業務に従事した。技術者と事務関係スタッフあわせて200名が働いていた。職場には食堂があり、持参した食べ物を電子レンジで温め、食事ができる。お昼は、弁当を持ち寄る職員の憩いの場となる。口頭のコミュニケーションがことのほか大切にされ、昼食の時間も、驚くような中身ではないのだが、にぎやかなやり取りで盛り上がる。おしゃべりに時に進んで時に辛抱強く付き合い、経験談を披露し合ううちに、トゥクマンの人たちは鷹揚なのかせっかちなのか、知るほどにわからなくなった。

スーパーマーケットのレジは常に大混雑している。一人ひとりの買物の量が多い上にレジの作業が極端に遅い。どのように遅いかと言うと、ほとんどの人がカードで払うのだが、既にカードで支払える上限額まで達していることが多いのである。そこでもう一枚カードが出てくる。それも足りない。最終手段として合わせ技を使う。２枚のカード（３枚のこともある）の額を合わせるという大技だが、それでも足りないことがよくある。すると、購入しようとした商品を一つまた一つとあきらめ、購入できる額に調整する。さっとやればいいのに、これは必要、あれも必要と選択に長時間をかける。こうしてどのレジにも待つ客の長い列ができる。舌打ちをするオバサンもいるが、そんなのは無視して、ああだ、こうだと切り捨てる商品の選別が続く。

なんといっても長く待たされるのが銀行である。銀行に金を下ろしに行くのは、ほとんど苦行である。避けたいのはやまやまだが、行かなければならないこともある。朝一なら大丈夫と思ったが、番号札はすでに数百番台。８時半頃に銀行に入って、出て来られた時は午後1時を回っていた。窓口立ったのは数分である。これだけ並ぶ客がいるとビジネスに生かす人間が現れる。札売り屋である。札を取っておき、後から来た客にその若い番号札を販売する。銀行手続き代行屋というのもあり、代わって銀行に行き取引を代行するという。

こんな日常に慣れると、忍耐強いのか、おおらかなのか、すごく気の長い人たちなんだなあと思ってしまいそうになるが、そんなことは無い。かなりせっかちな面もある。顕著なのが交通ルールへの対応で、運転する人はほぼ皆せっかちで危険極まりない。交差点で右折（日本だと左折）する時、横断歩道上の歩行者を確認、あるいは認識しない。おかげで何度か轢かれかけた。しかも、「危ない!」と怒鳴られたことすらある。別の町ではちゃんと車が止まり歩行者を横断させていたから、トゥクマンに独特な交通作法らしい。地元テレビの広報コマーシャルでも一時停止を呼びかけており、法的には歩行者優先である。

職場の食堂で弁当を隠して食べる人がいた。いい大人がどうしたのかと思ったら、魚のフライを持ってきたらしい。なぜ魚のフライを隠さなければならないか。臭うからである。魚嫌いの人が多く、嗅がされると露骨に嫌がるのである。新鮮な魚が容易には手に入らない内陸の町では、特に魚嫌いが多い。魚に限らず食べ慣れない物の匂いにも敏感で、住んだアパートで麻婆豆腐を作った時も即刻あからさまなクレームが来た。正統派麻婆豆腐のはずだったのに。知らない物、変わった物を調理すると、その匂いをかなり不快に感じるらしい。

赴任前に「アルゼンチン人は近隣のラテンアメリカの人を相手にせず、ヨーロッパを向いているようなところがある」と言われた。トゥクマンでは当初、気取っていて、とっつきにくいという印象はあったが、住んで知り合いになれば、そんなに冷たいとか気取っているとか感じることはなくなった。しかし、鷹揚なのかせっかちなのか、その時その時なのか、いまだによくわからない。（及川　義明）

”アールディーアイ通信　No.83／2016から”

写真：赤いロール式の機械からチケットを取って接客を順番待ちにする店もある。2015年

サンタフェ素描

田中　占領

写真：同僚宅で食事会　2010年

サンタフェ市はアルゼンチン北部サンタフェ州の州都である。州は、穀物生産や畜産が盛んな農業地帯にあり、国内有数の大豆の大規模生産地である。市街地を出ると広大な畑と牧場が見渡す限り続く。

アルゼンチンは移民の国であり、特にスペイン系、イタリア系出身者が多く、サンタフェも経済的にヨーロッパ志向の社会であり、文化的にはラテン民族の色彩が強い。アミーゴの国を実感したことがある。ある日バスの中で飼料会社の人と大豆の話をしていたら、知らないおばちゃんが話に割り込んできた。長年農業技術者として働いて来たと自己紹介し、バスを降りるまで30分間ほど、大豆の大規模栽培から始まり、土壌劣化、農業が衰退して勢いを失ったメソポタミア文明、そして現代の政治に至るまで機関銃のようにしゃべり続けた。とにかく話好き、世話好きで、親切心から私たちに話しかけてきたのであろう。だれかれ構わずたくさん話をすることは普通のことである。

日中の10時、昼、3時にはよくビスコッチオを食べながらマテ茶を飲む。甘しょっぱいクッキーのようなお菓子である。暑い時期でも温かいマテ茶を飲み、好みで砂糖を入れたり、ジュースを入れる人もいる。公園、川べりで、片腕に湯の入ったポットを抱え、もう一方の手にマテ茶を持って、友人、家族と延々と話をして過ごす人もいる。職場でマテの時間に話題となるのは、サッカー、食べ物、旅行、宝くじが多い。サッカーアルゼンチン代表のメッシはサンタフェ州の出身である。

昼食後2時頃から5時頃までのシエスタの時間はほとんどの商店が店を閉め、レストランは8時頃から開いて夜の食事は9時過ぎになる。特に金曜、土曜は遅くまで食べて飲むため、付き合うには持久力が必要である。週末にはよくカウンターパートと家族ぐるみで食事をした。普段は質素にスープ、サラダとパンにチーズ、サラミを挟んでワインとともに食事をすることが多いが、日曜の、豪華に塊肉を炙って焼くアサードが特に美味しかった。共働きの家庭が多く、週末はこうしてゆっくりと家族や友人と過ごすことが重要だと考えているようだ。女性がごく当たり前に働きに出る。社会でも男女の差別はなく、市役所の幹部にごく普通に女性が登用され、国政においても多くの女性が活躍している。個人主義が強い社会で、結婚の形にこだわらない。独身、離婚者も周囲には多い。基本的にレディーファーストで、女性に優しく、食事会でも男性が積極的に料理に腕を振るう。

ヨーロッパ系移民が多数を占めるが、日本人も100年以上前から移住をしている。年に一度の移民祭では各国移民の子孫が屋台を出し、舞踊を披露する。昨年6月の移民祭では、日本人会でも巻き寿司、天ぷらの屋台や折り紙コーナーを設け、和太鼓の披露をした。これより前、東日本大震災の一週間後に、日系人有志が追悼のためにエスパニャ広場に集まったときには、多くのサンタフェ市民も参加して、出身国ごとにグループが旗を掲げ、1分間の黙祷を捧げた。日本から遥か遠い地で、震災をきっかけに配属先や周囲の人から今まで以上によく声をかけられるようになった。（田中占領）

”アールディーアイ通信　No.59／2012から”

写真：移民祭で太鼓を披露　2011年

サンタエレーナ
素描 ~インフラ編~

リエラ　麻子

サンタエレーナは、エルサルバドル東部のウスルタン県に位置する人口2万人の町である。多くのラテンアメリカの町同様、中心部（ウルバーノ）は碁盤の目に石畳の路があり、公園とカトリックの教会を中心に町が作られている。サンタエレーナの地名はキリスト教の聖女エレーナからきており、キリスト教の影響が地名にも表れている。サンタエレーナの場合、ウルバーノから数本の路が山側に延びており、この舗装されていない路沿いに粗末な家が点在する。この地域をカントンと呼び、多くの農家があり、貧困層が住む。驚くことに粗末な家の中にも必ずスピーカーとテレビはある。しかも、結構新しいモデルだったりする。これは親戚の中に必ず一人は米国へ出稼ぎに行く人がいるという社会背景を物語る。彼らがアメリカからわざわざ買って持ってくるのである。エルサルバドルでも売っていないわけではないし、そこまで値段に差があるわけでもないが、米国に行って稼いできたという戦利品のようなもので様々なものを持ち帰る。

写真：市の中心部（ウルバーノ）　2010年

国土が小さいことも関係するのか、町をつなぐ幹線道路は非常によく整備され、ガタガタの道はほとんどない。しかしながら、サンタエレーナのカントンの路は同じ国かと思うほど整備がされていない。エルサルバドルは6月～9月に本格的な雨期となり、この時期は夕方から夜にかけてすごい勢いで雨が降る。雨が最も多い9月の降水量は約350㎜（日本は約200㎜）で、雨になれば路は川となり、しばしば通行ができなくなる。また路が水により削られていることが多く、よく車両が通行できなくなる。トラックの後ろに乗って移動することが多いが、カントンではきちんとつかまらないと振り落とされそうになるポイントが結構ある。

電気は一部のカントンを除いて安定的に供給されるが、短い停電はよくある。特に雨が降ると停電になり、連動して水道も止まることが多い。停電になると携帯電話の明かりを頼りにロウソクを探し、一時をロウソクで過ごすが、すぐ復旧しそうになければそのまま寝てしまう。通常でも9時頃までに寝ることが多いため、さほど大きな問題にはならない。しかし、扇風機が使えないため寝苦しい夜を過ごすことになる。

水道の普及率は電気より悪いが、サンタエレーナ市は日本大使館の草の根・人間の安全保障無償資金協力で水道を整備したため100％普及となっている。だが実際のところは、本管から自分の家まで水道を引いてくることができない人々もいて、まだ100％の普及率ではない。水道のない家では湧水や雨水を利用するケースが多い。水道の水は低地では不足することはあまりないが、標高が高めの地域では断水がよく起きる。そのため、全ての家がピラと呼ばれる貯水槽を持ち、洗濯や皿洗いはこの水を使う。ピラに水を貯めておくとボウフラの生息地となってしまうが、対処法として2種類あり、塩素の錠剤を入れるか、魚を飼う。サンタエレーナは低地であり年中暑いため気持ちよく水シャワーを浴びることができるが、標高が高く肌寒い地域もあるにもかかわらず、温水設備は整っていない。なぜ温水を用意しないのかと聞くと、「体に良くない」「はげる」といった回答が返ってきて、温水を用意することには興味がないようである（確かに、はげている人は非常に少ない）。

気温は40度近くになることもあるが、エアコンは市役所の一部の部屋と一部の弁護士オフィス等にあるだけで、あとは扇風機と自然の風を待つという方法で暑さをしのぐ。カントンの人々は、早起きをして涼しいうちに活動し、暑くなってくるとハンモックに寝そべって涼むという、自然に逆らわないエコな生活を送っている。（リエラ麻子）

“アールディーアイ通信　No.59／2012”から

写真：カントンへ続く道　2010年

写真：市内の教会　2010年

メキシコ・アクトパン村素描

増渕　清

アクトパン村は、ベラクルスの港から北西に約80kmにある山間の村で、人口の6割が農牧業に従事、平地では、トウモロコシ、サトウキビやマンゴ、山間地では、コーヒーや野菜、梨、リンゴが主な作物。地名は、先住民のナワトゥル語の「地下に埋もれた水のある場所」に由来するとかで、村内を州内大河川の一つであるアクトパン川が流れ、ラフティング等の観光資源にも恵まれている。この川はメキシコ湾に注ぎ、16世紀にスペインから遠路遥々メキシコにやって来た、かの有名なエルナン・コルテスが船団を係留したとされる場所としても有名。スペイン語でセイバ（Ceiba）と呼ばれる、カポックやバオバブの仲間の巨木の下に看板が立てられている。「コルテス船団が係留した巨木」とあるが、寿命が300年から500年ほどだそうで、「係留した巨木」は、現在ある木の先代か先々代である可能性が高いと言わざるを得ない。

写真：コルテス船団係留の巨木　2008年

写真：アクトパンの目抜き通り　2008年

村はベラクルス州内の野菜や果樹の主産地であり、2007年に始まったプロジェクトの対象地域3ヵ所のうちのひとつ。非伝統的な熱帯果樹の栽培を通じて、小規模農家の人たちの収入源の多様化と生計向上を図る。大半の農家の人たちは、トウモロコシやサトウキビと山間地の果樹や野菜で生計を立てている。市場の値動きに一喜一憂しつつ、「イホ・デ・ラ・チンガダ」のメキシカンスピリットで逞しく生きるおじちゃん、おばちゃんがいる一方で、若者達は一攫千金のアメリカンドリームに将来を託し、北を目指す。当然のことながら女子供と高齢者がやたらと目に付く集落が多いなか、パッションフルーツやトゲバンレイシ、サポジラやノニなどの新規作物で起死回生を図るチャレンジ精神旺盛な農家も出始めている。ちなみに「イホ・デ・ラ・チンガダ」とは、英国人がしばしば呟く「bullshit」に相当し、あまりすすめられる表現ではないが、メキシコ人は「ヤバイ」状況になったり、一発気合を入れようという時に、こう叫ぶ場合が多々ある。

野菜の中ではハヤトウリが主産品。ハヤト（隼人）ウリは、熱帯アメリカ原産のウリ科の植物で、別名「千成ウリ」とも言う。日本への伝来は比較的最近のようで、大正初期に鹿児島に伝わったことから、薩摩隼人の名前を取って、ハヤトウリと名づけられたという説もある。実の大きさはにぎりこぶしくらいで、緑色と白色の２種類。味は淡白で、これといった特徴は無く、西日本では漬物が一般的のようだが、メキシコでは、スープ、温野菜サラダ、カペアド（capeado）が代表的消費方法。カペアドのイメージとしては、天ぷらが一番近いかも知れない。チーズやひき肉を充填し、泡立卵白を衣にして揚げるため、そのまま食すると油っぽく何やらフワフワして歯ざわりもなく、これといった特徴はない。しかし、ひとたび、トマトベースのサルサ（加工用トマト、ニンニク、玉ねぎ、トウガラシ＋適量の塩、コショウ、オレガノ＋水をミキサーですり潰し、煮立てたもの）で軽く煮込むと豹変する。カペアドにハヤトウリも使われるが、この料理法では、チレ・レジェノ(大型のトウガラシの肉詰め)や、白身魚を素材にするものが代表的。

ハヤトウリはヘチマのように蔓が伸びるので、メキシコでは棚作りが行われている。ちなみに、ハヤトウリは種子ではなく、実を直接植えて栽培する。最近、値崩れと病気の発生で、農家の人達はハヤトウリに替わる作物としてパッションフルーツ作りに精を出している。ハヤトウリもパッションフルーツも、棚を作って栽培するのがメキシコではポピュラーなので、ハヤトウリが儲からないと見ると、サッサと転作する農家の皆さん、したたかに、逞しく生を営んでいる。（増渕清）

写真：メキシコ版道の駅　2008年

”アールディーアイ通信　No.38／2008から”

パラグアイ・アスンシオン素描

攪上　正彦

写真：中心に近い市街、向こうにパラグアイ川 2006年

2006年に移住70周年記念行事が行われたように、日本人のパラグアイ国での生活の歴史は長く、現地の生活にたいへんよく調和している。韓国人と台湾を主とする中国人移住者の数はもっと多いが、日本人移住者の特に農業分野での長年にわたる業績は高く評価されており、ほかの中南米諸国で経験する、アジア人が蔑視あるいは軽視されるような経験は、2年間の仕事と生活の中で一度もなかった。日本人、アジア人にとても親切な国、国民である。

アスンシオンの物価は、生活必需品に関しては極めて安い。農畜産品、特に肉類は、地方はともかくアスンシオンでは、スーパーマーケットで様々の種類の肉、品質の高いいろいろの部位の牛肉をいつでも大量に安く手に入れることが出来る。公的、私的を問わず、飲食を伴うちょっとした集まりがあれば、この牛肉を焼いてたらふく食べる。数キロの肉塊に岩塩を振りかけただけで遠火で何時間もかけて焼く、アサドと呼ばれる焼肉パーティである。参加者ひとり分に1キロ前後を用意する。青果物は、日本人移住者の努力のおかげで、多種類の新鮮で高品質の野菜と果物が一年を通じて市場にあふれている。減農薬野菜もだいぶ前から手に入るようになっている。ビール、ワイン、ウィスキーなど酒類も安く、日本での飲酒を考えると驚くほどの価格である。思う存分いろいろな種類のビールを飲めてたいへん幸せであった。酷暑の夏の期間が長く、冷えたビールは必需品であるが、特に、柔道の練習の後、アサドの時、釣果に関わらず釣りの最中や後のビールの味は最高である。海の魚は市場に少ないが、スルビ（なまず）、ドラド、パクーといった白身の淡水魚が容易に手に入る。飲食だけで考えたら、生活するのにはたいへん快適な国と言える。

治安の良い国で、隣国ブラジル、アルゼンチンでの犯罪増加の影響のためか、最近こそ悪化傾向があるが、それでもほかの中南米諸国と比較するとまだまだかなり安全な国と言える。空き巣、強盗、引ったくりなどの被害を時折耳にはしたが、2年間の滞在中にその

写真：休日の会食　2007年

ような被害に一度も遭わず、危険を感じたことすらなかった。ほかの中南米諸国で経験するような、危険を感じさせるような視線、雰囲気もなかった。会う人、話す人のほとんどが親切であり、みんながのんびりしている国なのである。

「日本パラグアイ人づくりセンター」で夜に行われている柔道教室に週1～2回ずっと参加してきた。この柔道教室は週に3回開かれ、少年部と成人部のうちの成人部に参加した。技の指導というところまではいかないが、乱取りを通して私が今までに学んできたものを吸収してもらえればと、腕力では私より勝る若い練習生相手に汗を流した。柔道着の代わりに空手着などの薄手の生地を使った練習着で稽古をする参加者が目立ち、道着をしっかりと持てないことからいい練習が出来なかった。パラグアイでは柔道着の入手が難しいためだった。その頃までにシニア海外ボランティアも申請が可能になっていた「世界の笑顔のために」プロジェクトに申し込んだところ、任期を終える直前に申請した数の3倍ほど、70着

写真：パラグアイで釣りを楽しむ　2008年

もの柔道着を送っていただいた。寄贈者に深く感謝するとともに、この柔道着を活用して、パラグアイ柔道が更に発展することを期待したい。

“アールディーアイ通信　No.36／2008”から

写真：送られてきた道着を手に喜ぶ　2007年

ボリビア・ヤパカニ素描
―先住民の内国移住地―

小林　進介

広大な低地平原が広がるアマゾン上流のボリビア東部地域には、アンデス高地の先住民（主にケチュア族）が住む内国移住地が点在します。その一つ3万人あまりが住むヤパカニは、拠点都市サンタクルスから北西120kmに位置する米作と畜産が主産業の町です。国道沿いの両側2キロ半を除いて電気はなく、また、水に不自由する地域が広く分布しています。乾燥冷涼の高地とまったく異なる亜熱帯の地で、政府の支援をほとんど受けることなく、40年以上にわたり自力で未開の地を切り開いた彼らの忍耐強さには敬服します。しかし、その貧しさは、川を挟んだ東側の日系サンファン移住地の豊かさとは対照的です。

厳しい生活を強いられてきた彼らにとって、とにかく牛飼育は欠かせません。子供の栄養補給には牛乳が一番です。国道から遠く離れた部落に住む農民は生乳を搬出できないため、生乳を凝固させ水切りし、肉マン状に形を整えたチーズ(ケシージョ；Quesillo)を売り、日銭を稼ぎます。このチーズは、水分を多く含み日持ちは一週間程度と短いが、豆腐代わりに出来立てを味噌汁に添えると案外いけます。

ところで、この国の最大の課題、貧困対策は、ヤパカニの地で私が関わっているJICAプロジェクト「小規模畜産農家のための技術普及改善計画」の課題でもあります。このプロジェクトでは、零細農家の生活の安定化と向上を目指して、草地管理や飼育管理等の技術指導により1頭当たりの搾乳レベル（2～5L）を30～50％増加させることを目標の一つに掲げています。

酪農、肉牛生産などの畜産は、作物生産とは異なり長雨や旱魃等よる被害を受けにくい利点があります。また、畜産は、地力の乏しいこの地域一帯では持続的土地利用を可能にする生産手段として欠かせません。長年この土地に生きてきた農民はこのことをよく認識しているようです。農民に対する本格的な技術指導は、昨年11月に開始されたばかりです。農民は、自分たちの生活を自らの力で改善していくすべをまだ手にしていません。プロジェクトでは、低コストで農民が導入できる適正技術の発掘・開発を進めています。農民への適正技術の指導において彼らと同じ目線で仕事ができれば、プロジェクト目標が達成され、更なる発展が期待できるかもしれません。

写真：ボリビア・ヤパカニケシージョつくり2005年

（小林進介は2004年12月から、チーフアドバイザーとして小規模畜産農家対象の技術普及改善プロジェクトに従事）

“アールディーアイ通信　No.23／2006”から

ドミニカ共和国
サント・ドミンゴ素描

攪上　正彦

シニア海外ボランティアとして平成15年10月から平成17年10月までドミニカ共和国に派遣されました。派遣国ドミニカ共和国はコロンブスが発見した国でカリブ地域に位置します。面積は九州と四国の高知県を足したほどの大きさです。島中が亜熱帯地域と思いきや、島の中央部には標高3,150mの山もあります。人口は850万人ぐらい。季節は雨期と乾期に分かれ、11月から3月までが乾期です。乾期の首都のサント・ドミンゴ市の1日の気温は18～30度で変化します。朝晩は18度となり、比較的過ごしやすい時間です。

観光が国の主産業となっていて、美しいビーチリゾートがたくさんあり、スキューバダイビング、サーフィンなどのマリンスポーツにはもってこいの場所です。乾期にはアメリカやヨーロッパの国々から避寒のため、あるいは植民地時代の史跡めぐりでこの国を訪れる観光客が多いようです。首都近くのボカチカというビーチに行ったことがあります。気温は低かったのですが、珊瑚礁で囲まれ、波の静かな透明度の高い海で小魚を見ながら泳ぎ、のんびり過ごしました。

国民は、ラテン系の白人と黒人との混血が70%以上を占め、とても陽気で気さくな人達です。メレンゲ、バチャータといったこの国特有の音楽が更に心を陽気にさせてくれます。踊り好きな人達にとってもすばらしい国と言えるでしょう。

勤務先はドミニカ共和国の首都、サント・ドミンゴ市役所でした。この市役所には、固形廃棄物処理、環境行政、都市計画とコーディネーターの4人のボランティアが派遣されていました。私の職種はグループコーディネーターで、同じ職場に派遣されている他のシニア海外ボランティアをサポートする仕事でした。この国も他の国と同様に、ゴミ問題、環境問題、都市計画問題が深刻となっています。ゴミ処理場の整備、ファーストフードに関連したプラスチック容器の処理、ゴミのリサイクル、車の排気ガス、下水処理等、日本が以前、あるいは現在も抱えている問題がたくさんあります。

写真：ドミニカ自治大学 柔道クラブのメンバー
上段左から2番目が山下先生、その下が筆者　2005年

仕事後の夜と休日の余暇時間を利用して、サント・ドミンゴ自治大学の柔道クラブでの練習に週に1～2回程通いました。指導者は30年前に日本から移住してきた歯科医の山下先生です。ドミニカの柔道は、中米、カリブ地域ではキューバに次いで強いほうです。こちらの柔道はキューバ式柔道に近く、力の柔道という印象を受けます。試合では容易には組ませてくれず、すぐに足をつかんできたり、肩車といった相手を持ち上げる技をかけようとします。こちらが寝技で押さえ込んでも、柔道着を持っている腕を腕力ではずされたり、腹筋力ではねのけられてしまいます。とにかく力が強く、その強靭なバネには驚かされます。コンクリートの床にマットを敷いた道場で、練習中にマットがずれてしまい、脚の指をマットとマットの間に挟んで怪我をしたりするので注意が必要です。25年ぶりに成人(大学生)との練習に参加したのですが、体力がついていかず、かなり手を抜いて参加しても練習後はへとへとになってしまいました。健康管理で再開した柔道でしたが、いつのまにか仕事よりも、柔道での国際交流のほうで熱が入ってしまった2年でした。

“アールディーアイ通信　No.22／2006”から